
元魔王の覚醒(悪ルート)

ブレオドラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元魔王の覚醒（悪ルート）

【Nコード】

N8777V

【作者名】

ブレオドラ

【あらすじ】

かつて異世界に行き魔王として自儘に生きた大祐とその部下たちは元の世界に帰ると同時に人間に戻っていた。人として修業し強くなった大祐たちは強さを競う世界大会に出場する。その大会での一戦が大祐の、そして世界の未来を大きく変えることになった。

この物語は残酷な描写があるので苦手な人は注意してください。

またこの作品は『元魔王様、頑張る！』から派生した物語です。

IFルート？ではありませんが本編より未来ですのでネタバレ注意し

てください。

最初の目覚め（前書き）

元魔王様、頑張る！をまだ読んでいない人へ。

この話は元魔王様、頑張る！28話からの分岐です。

準決勝 第1試合 笹川大祐 VS サーマレイスⅡセラヴァイル

大祐はサーマレイスの攻撃を受けて倒れ伏し、これ以上の戦いを諦めたところからの話です。

最初の目覚め

魂と肉体は相互に影響し合う。

異世界で魔王の肉体を得た大祐は、その魂を魔王に汚染された。

そうして魔王となった魂は再び火星に戻り、人の肉体に収まった。

魂と肉体は相互に影響し合う。

故に魔王の魂の影響を受け、大祐の性欲は日々増大していた。

一方で魂も肉体の影響を受けていた。

脆弱な人が魔王の魂本体を変質させることはできないが、魂の表面に人としての性質が付着した。

魔王と比較すれば微々たるもの。

しかし、あくまで肉体を介して世界に存在する魔王大祐にとって、その表面の部分が魔王としての完全な覚醒を妨げ、人としての理性を保たせていた。

尤もこれは大祐本人が魔王の力はいらない！自分の力でやり遂げてみせる！という強い意志を持っていたことも大きく影響しているのだが、

それが無くなった。

サーマレイスに倒され、心が折られてしまった。

諦めてしまった……

サーマレイスにより斬られ肉体が傷つき弱まったこと。

心を折られ意志がくじけたこと。

この2つの要因によって、今まで微妙なバランスで保たれていた天秤が一気に魔王側に振れた。人としての部分を押しつけ魔王が表面に現れる。

結果として魔王は目覚め始めた。

変化は突然だった。

サーマレイスは自分が倒した男を見て、心の中で称賛の言葉をかけていた。

観客やアナウンス、勝敗の判定員も試合の終了を理解しサーマレイスの勝利宣言をしようとしている。

「準決勝第一試合、勝者サーマレイ
」

言葉が途中で止まる。

歓声を上げかけていた観客もシーンとなる。

サーマレイスも表情を真剣なものに変えてそれを見つめた。

大祐の身体が炎に覆われていた。

（あれは不死鳥の巫女の。）

サーマレイスは直ぐにその正体を見破ったが変化はこれだけではなかった。

再生の炎の色が徐々に黒くなってるのもそうだが、それ以上に大祐の魔力がありえないほどに高まっている。

先ほどの一撃でほとんどの魔力を使い切ったはずが、下級、中級、上級相当の莫大な魔力とっている。

その強大な魔力と何より発せられる禍々しい気配を察知したサーマレイスは危険な存在と認識。

即座にとどめを刺すために魔法を発動させようとしたとき！

一際強い魔力を放ちながら大祐が起き上がった。

その魔力に気圧されたのと、一旦様子を窺うために魔法陣はそのまま魔法を止めたサーマレイスからは表情がわからない。

ただ自分の身体をじっくりと見ているようだ。

大祐は、力が湧きあがるこの懐かしい身体を取り戻して思う。

（魔王の身体になってしまったか……）

再生の炎が“魔王の身体”を再生し終えて消える。

（所詮、負け犬は負け犬。人としての私が何をしたところで貴族や幼馴染あいつらに勝てるはずもなかった……）

真紅の瞳で身体の状態を確認する。

（だが…それも、もうどうでも良いことだ。）

突然の覚醒でまだ完全ではないがそれでも人間とは決定的に違うその身体。

（もう目覚めてしまったのだから。）

同時に破壊の欲求や殺人衝動でさえも蘇りつつあった。

顔を上げた魔王はその真紅の眼でサーマレイスを見つめる。

それに対しサーマレイスは即座に魔法による攻撃を加えた。

いろいろ聞きたいことや確認したいことはあったが、それ以上に危険な存在だと本能が訴えている。

今までとは違い一撃で殺すつもりで全力の魔法を放つ！

放たれた魔法はスピードもパワーも今までの比ではなかった。一瞬にして大祐の元まで到達し貫く、と思われた瞬間に大祐の姿が消えた。

直ぐにサーマレイスの後ろに現れ、彼女が驚く間もなくその腕を取る。そしてそのまま左腕を握り潰した。

「うあああああああああ！！！」

普通のサーマレイスからは考えられないような絶叫が響き渡る。

「やかましいぞ。痛覚を10倍にした程度で一々喚くな。」

魔王は鬱陶しそうな顔をして言ったあと、掴んだ腕を離しサーマレイスの顔を殴り飛ばす。本人にとっては軽く、人間にとっては絶大な威力で！

吹っ飛ばされたサーマレイスは必死に魔法で回復させながらふらふらと立ち上がる。その顔には貴族としての誇りはなく戦意と警戒、恐怖があつた。

「最初からこうすれば良かったな。」

サーマレイスを見ながらぽつりとつぶやく。

「あれだけお前を手強く感じていたのに……今はもう敵とさえ認識できない……」

そしてその身から莫大な魔力を放出させつつ声を大きくして叫ぶ！

「努力をして力を得るなどバカバカしいな……ふ、ふふふはっはははははは！！我ながら愚かなことを考えていたものだ！！そうは思わんか！？サーマレイス。」

サーマレイスは答えない。答えず必死に回復を行うが上手くいかない。ほんの少し触られただけで、大祐の魔力が色濃く残りそれが魔法による回復を阻害する。

そして魔王は返事をしないサーマレイスに気にせず一人で言葉を続けている。

「人として努力して得られる力など、この魔王の力の欠片ほどもないではないか！？くだらない！！アハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」

一人で笑い転げる魔王！

だがその身から溢れる魔力は尋常ない。あまりに濃密な魔力はその濃度の高さゆえに黒いオーラとして可視化されるほどになっていた。

一方これを見ていた観客席では部下たちが真っ青になって話し合っている。

「やばいってこれ！？どうすんの？」と慌てた声でエロ太が言う。

「どうするって……………どうしようもないだろ……………」

「だけどここのままじゃ、取り返しのつかないことになるぞ。」

同じく慌てたAやDも震えながら言葉を発する。

他の観客たちも急な展開に呆然となっている。その眼下では一人哄笑している魔王と、それに対し魔法を放つサーマレイスがいる。

だがサーマレイスの放つ魔法は1つたりとも大祐には当たらない。ただ笑っている魔王の身体から放たれる魔力によってすべての魔法が止められていた。

「まだ、起きたばかりだから1割も力を出せないと思う。だから今のうちに！完全に覚醒する前になんとかしなきゃ！」

Dの言葉に2人は頷き、部下たちは必死に対策を検討し始めた。

一方、フィールドではようやく大祐が落ち着きサーマレイスを見つめていた。

サーマレイスはそんな様子も気にせずひたすらに魔法を放ちまくる。

強烈な毒性の花粉、ダイヤさえ断ち切る葉の刃、物理的には金でさえ魔法的には一部の上級の結界さえ溶かす強力な酸性の粘液、他

にも肉食植物、吸血植物、強靱な弦に金剛の樹などありとあらゆる上級植物魔法を放ちまくるがどれ一つとしてギリギリのところで大祐まで届かない。

（まさか、これほどとは予想していませんでしたね。）

心の中でそう思いながらもひたすらに魔法を放つ。少しでもこの魔王という存在のデータを測定するために。

そう、実際のところ今のサーマレイスは焦ってはいなかった。

最初は直感でやばいと判断し慌てたが、魔法で精神を安定させたため今は落ち着いている。

魔力の感覚的に危険な存在だというのは今も思っているが、会場を囲む強力な結界の効果が作用すればこのフィールドに入った時の状態に戻る。詳しいことはその時に聞けばよい。

大祐の魔力から考えると今のサーマレイスでは敵わないのがわかる。だが実のところサーマレイスも先ほどまでの戦いでかなりの力を使っているので全力時ならばここまで一方的な展開にはならないだろう。

他にも本家の当主たちならば十分対応できるレベルであり、特に虹髪一族の次期当主の方が大祐よりも強い魔力を持っている。あるいは上級者たちが複数名で協力すれば問題なく対応できると考える。

ただこれが会場の外で暴走した場合などに備えて、多くのデータを計測しようとしている。

しかし1つだけ問題があった。

この時サーマレイスも自覚できないわずかな焦りと恐怖が彼女の判断を鈍らせたのであろう。現在感知できる魔力が大祐の最高の状態だと思い込んでしまった。

それも仕方がない。彼女は生まれながらの強者であり恐怖を感じることなのそれほど多くはなかったのだから。

そして貴族の中でも上位であるサーマレイス以上に強いものはこの会場にはいないため、貴族や政府の人間は魔王の力の大きさを正確に把握することができなかった。

これが、のちの悲劇を引き起こす原因の一つとなるのだが……

サーマレイスが魔法を撃ち続ける間も大祐はただ彼女を見つめていた。

いや、正確には考え事をしているだけでサーマレイスを見てたわけではないのだが……

（まだ、完全ではないか……）

黒い魔力をまき散らしながらそう思っていた。身体から溢れる魔力は大祐が意識したものではない。何もせずとも勝手に出てきてそれが偶然サーマレイスの魔法を防いでいるだけだ。

無意識に魔力が溢れている時点でまだまだコントロールしきれないのがわかる。おまけに溢れる魔力にしても、完全に覚醒した場合の1割にも満たない量だ。

身体は完全に魔王のものとなったのに何故、力は不完全なのか？

おそらくは魂にわずかに人間の部分が残っているのだろう。結果としてそれが身体と魂の接続を妨げていると考えられる。

この人間としての残りカスを完全に消さない限り、これ以上の力は引き出せないであろうことが感覚でわかる。

しかしそれはあとで対応しようと考え、さつきから目障りな女で遊ぶために意識をそちらに向けた瞬間、不思議な魔力の波動を感じた。

見上げると、この会場の開けた天井から見えるただ一つの外の建物である始原の塔が見える。その遙か頂上、雲を越え大気圏から出るギリギリの高さにある部分から不思議な魔力が放出されている。

もちろん魔王であっても素の状態では高すぎるために見る事ができないが、魔法によりそれが感じ取れる。周りの観客は、サーマ

この後のことは簡潔にまとめる。

急激な変化の連続による激痛が走り、そのまま大祐は気絶した。

結果としてサーマレイスの勝利となり、大祐は敗退となった。

観客たちはあまりの展開に呆然とし何とも言えない表情をしていた。

ただ大祐に対しては変な奴、あるいは頭のおかしい奴と思う程度の認識であり、真に危険な存在と気づいたものはいなかった。

大祐はサーマレイスに攻撃を加えたものの彼女は即座に反撃に移ったし、その後大祐は一人で笑いまくり、そしていきなり苦しみ勝手に倒れた。

傍から見ているものにとっては釈然としない意味不明な展開となっただけだ。

だからこそ多くの者は恐怖を感じることはなく、中には大祐をバ力にする者までいる始末だった。

これもまた悲劇へとつながる要因となる。

試合後の結界の再生機能により元の状態に戻った大祐はそのままサーマレイスたちと会談。この時には元の間人としての大祐に戻っていたので魔王の力を取り戻す意思はなくなっていた。

今回の変調の原因を話し今後再び暴走する可能性があることを考え、始原の塔での設備を使い、魔王化抑制のための研究を行うことを提案し承諾される。

以後大祐たちは学校へ行かず研究を行っていた。しかし魂への干渉はかなりの精密作業であり、人のみでそれをしようとするのは困難であるため研究はなかなか進まない。それに対し表立っては見えないが魔王化は着々と進行していた。それに伴い精神も変質していく。

貴族、政府側は監視をつけながらもこの事態をそれほどの脅威とはみなしていなかった。それは貴族の中でも上位者であるサーマレ

イスの見立てと大会で計測されたデータから軍で十分に鎮圧できるレベルと認定されたからだ。

さらに大会からある程度経っても大きな変化は観察されず、定期報告も問題なく行われていたためでもある。

あとになってこの判断が間違えだったと知るがその時には遅い。

彼らはこの覚醒する前に大祐を殺すべきだった……

そして時は流れる。

必死に抑え込み表には出さなかったが、半分ほど思考が魔王に染まった時に異世界への扉が開くことで時代は大きく動くこととなる。

最初の目覚め（後書き）

難産でした……というのも最初はサーマレイスをボコボコにする話を書いたんです。四肢を壊して、耳や目もひどいことになって体や顔を蹴りまくってと。

しかし書き終わってからこれをやってしまうと政府から危険人物として暗殺対象にされて異世界編へとつながらなくなかね？と気づいたために一から書き直すことに……。この話も改めて書き直すかもしれません（やるとしたら異世界編が終わってからになります）

そんなわけで魔王が火星で大暴れするのは異世界編が終わってからになります。

気長にお待ちいただけると幸いです。

異世界編 プロローグ（前書き）

本来はもう少し後に書く予定でしたが、私がどうしても書きたくなっただけ書いてしまいました。まだまだ未熟な私の作品ですが読んでくださってる方でちゃんとした順番で読みたいという方はこちらを読まず本編が進むのをもう少しお待ちください。

異世界編 プロローグ

火星の国家、通称『開拓者』の首都中心に高くそびえる塔『原初の樹』。街一つが入るその巨大な塔の中層に研究室が与えられた大祐は、部下とともに今日も研究を行っていた。

前回の大会で魔王の力が覚醒して以来、日を追うごとに魔王の力が身体を侵食しているのがわかる。それを食い止め人として生きるのかあるいは受け入れ魔王として復活するのか？自分の中で答えが出ていない。

優しい人に触れると愛しく思い、守ってあげたいと思う。

傲慢な人、横暴な人を見ると感情のままに殺したくなる。

人と魔王

善意と悪意

理性と本能

大祐の中ではそれが危ういバランスで存在していた。

しかし、ついにその天秤が一方に振れてしまう日がやってきた。

「うーん…」

「どうしたんだリーダー？」

浮かない顔で唸ってる大祐に風太が尋ねた。

「なんか変だ。」

「変？」

「そう。変。」

さすがにそれだけの情報では何もわからない。

風太ことエロ太は山彦や竜也と顔を見合わせるもみんな心当たり

はなかった。

ちょっとしたミスをしてしまった昨日の実験のことかと思った山彦は

「おかしいデータがあったか？どこかでミスしたかな」と尋ねると

「違う。そんなじゃなくて空気といふかなんというか……」

ますます訳が分からない。すると大祐がいきなり

「あーもうとりあえずついてこい！なんか変な感じがする場所があるから行ってみよう。」

そしてついて行った先にあるものを見た部下3人は

「これは…」 「ウツソ」 「マジか…」

そう呆然と声を発した。

それもそのはず、普通に生きていれば 99・9999999999
%の人は“それ”に遭遇することなどないのだから。ましてや2
度目となるともっと低い可能性だ。

「さすが俺様！まさかもう一度この日が来るとは」

そうそこにあるのは“異世界への扉”

『ゲート』だった。

1話 勇者の召喚

「…ヴェスタ、オーラ、シーサ、ルーフエン、ザクツエン…」

玉座に座る王から離れた位置で10名の魔術師が召喚の儀式を行っていた。

「…ヴェスタ、オーラ、シーサ、ルーフエン、ザクツエン…」

本来なら10分ほどで終わる詠唱。しかし既に20分は経過している。

それはより強大な力を持つ勇者を召喚するために研究した結果、何度も繰り返し詠唱することによってより強力な力を持つものを召喚できると判明したからだ。

「…ヴェスタ、オーラ、シーサ、ルーフエン、ザクツエン…」

かつて人間は獣人、エルフ、ドワーフなどの亜人あるいは人間同士で争っていた。そこに強大な力を持つ魔族が攻めこんできたことで人は争いをやめざるを得なかった。圧倒的な力を持つ魔族の前に人や亜人は協力して戦ったが、それでも敵うことはなく緩やかに敗北していった。

そんなときにある魔術師が召喚の魔法を生み出した。それにより味方の数を増やそうとしたが呼び出されたのは数名の異世界人であった。

しかし彼らが戦局を変えた。異世界人は強大な力を持って召喚されたのだ。その力を持って魔族と戦い、ついには魔族を押し返すことに成功した。魔族は敗戦により分裂し内紛となった。これにより戦争は終わったのである。

そして異世界人は人々に乞われ、それぞれの国を作った。

しかし時は流れ、人はまた争うようになる。

古の伝説。

異世界の勇者。

それらが呼び出され戦争に利用されるのは当然の流れだった。

異世界人の魔力を受け継ぐ各国の王族はその魔力を利用し勇者を呼び出す。だが呼び出されるものすべてが自分たちに協力してくれるわけではない。そう悟るのにさほどの時間はかからず、そのために召喚には改良が加えられた。

今、召喚を行おうとしている国、『オルティガ』では召喚された異世界人の魂に隷属の鎖をつけられるようになっていた。それにより勇者は王族の命令に対し疑問を抱くことなく服従するようになる。

（繰り返す詠唱により、魔力を過剰に供給することで過去の誰よりも、他の国の勇者よりも強力な異世界人を呼び出すのだ！そして世界を征服する）

そう考える王の前で魔術師が囲む魔法陣はより強く発光する。

「…ヴェスタ、オーラ、シーサ、ルーフェン、ザクツェン…」

魔術師たちは慎重に詠唱を行う。筆頭魔術師でもある第2王子は思う。

（失敗は許されない。この儀式は1度行えば100年間行使不可能になる。何としても成功させる。そしてこの国も世界も私のものに！）

そして魔法陣は青の輝きから赤い光へと色を変えた。

「ヴェスタ、オーラ、シーサ、ルーフエン、ザクツェン、フィラス、エンデ！」

途端に目がくらむような光が溢れる。

「クッ!!」

誰かが声を漏らした。

そして光が収まったとき、人々が目を開いた先には『4人の男』
がいた。

2話 人生2回目？の異世界訪問

（どんな世界だこは。）

ゲートに飛び込むと同時に強い光が差し込んだ。そうして光が収まる気配を感じてエロ太は周囲を見渡した。

自分のすぐそば正面のちよつと右に大祐が、自分に並んで右に山彦が左に竜也がいる。足元には巨大な魔法陣があり、大祐はさつそくその魔法陣を観察している。半径10メートルほどの魔法陣の縁に沿って10名の男女が等間隔に並んでいる。おそらく彼らが召喚術を行使したのだろう。

部屋全体を見渡すとかなり広いことに気付いた。体育館ほどの大きさはあるだろう。壁際にはたくさんの兵士らしき連中が武器を持ち整列している。さらに奥には僕は選ばれた血統ですと言わんばかりの豪華な衣類をまとった貴族っぽい連中。みんな俺たちを観察している。どうやら驚いているような表情のものと観察しているようなやつとの2通りの人間たちだな。

正面の奥が段差となっておりその一番高いところには玉座に腰かけた男性がいた。その隣には輝く金色の髪にすらつとした体のラインが浮き出るドレスを着た美しい王妃がいるのがわかるがそちらには目がいかない。ただ玉座に腰かける男に目を奪われる。

頭を下げたくなるような、畏怖するような不思議な感情が胸の奥から湧き上がる。

そこでふと、違和感を覚える。

（女好きの俺が女よりも男に意識を奪われている。まさか俺は男好きになっちゃったのか！？ いやいやそんなわけねえ。そもそも異世界にこうしてきたのは美しい女奴隷を求めてだ！断じて男が目当てじゃない！）

もう一度玉座に目を向けるとやはりそこには金髪の40歳代くらいであるうなイスミドルがいらっしやった。

美しいオールバックの髪に、しっかりと鍛え上げられた衰えを感じさせないボディ。彫りの深いワイルドな顔立ちと全体から発せられるオーラみたいのが見えるようでカリスマを感じさせる。

（ああ…なんて素晴らしい方なんだ。もうホントあの方になれば俺の後ろの初めてを捧げても、俺があの方の穴を掘るのもどちらでも…）

そこまで考えてエロ太は我に返った。

（うそ！？ウソ嘘うそウソ嘘うそウソ嘘うつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつそーーーーーー）

――！！！？！？！？！？！？！？！

何考えてんの俺？あり得ない。ヤバい泣きそう…）

自分が思ったことのおぞましさに涙を浮かべたエロ太は何気なく左右を見ると山彦と竜也も玉座の男に心を奪われてるのがわかった。

そこで再び違和感に襲われる。

（どういうことだ？俺だけじゃなくこいつらまで。こいつらも俺と同じく好みにうるさいようで綺麗な女なら誰でも良いってタイプだぞ。あの王妃っぽいのは明らかにストライクだろうに男の方を見てる……………もしかして！？）

頭の中にある仮説が浮かんだ工口太は何気なく大祐を見るとその変化に驚いた。

開拓者はもと日本人であつた初代皇帝が人類初めて火星に到着し建国した国である。なので国民の大半は日本人の血が少なから

ず流れているし、今ここにいる4人は明らかに日系の外見だった。

黒髪黒目、168センチと微妙に170台に届かない身長。頭が
大きめで足は少し短い。顔も決してイケメンではなく整った顔立ち
の笹川家の中で唯一の例外、一瞬血が繋がってないのではと考え
そうになるがよく見ると結構似てる顔立ち。それをよく愚痴ってた
リーダー笹川 大祐。

そのリーダーの瞳が今は“真紅”に染まっていた。

それは魔王の証。

魂に刻まれた魔王の力が肉体を侵食している証。

1500年もの間、世界を気ままに蹂躪した“主君”の瞳。

大祐は真紅の眼を魔法陣へと向けている。魔法陣に描かれた式の
情報を解析しているようだ。

仮説なんて頭から吹き飛び、『なんで今魔王の瞳が!?!』そう思
ったとき

「異世界より来られた勇者のみなさま。どうぞこちらへ」と召喚士
の1人が進み出て言った。

それは玉座に座る男によく似た青年、筆頭魔術師でもある第2王子シュタイナーであった。その声を聴くとすぐに疑問も掻き消える。

（この方もまた素晴らしい方だ。美しい声が心に響いてくる。）

指示に従い歩こうとする……………

（……………や、待て待ておかしいぞ。俺は女が好きなんだ！……………それにしても立派な体躯だ！魔力もあるし素晴らしいな。ぜひ俺の恋人にーって……………うーん…もう何なのこの状態！？……………ひとまずあとだ。ごちゃごちゃ考えるのは後にしてリーダーの動きに合わせよう。たぶん大祐は正常っぽいし。極力床を見るようにしよう。）

シュタイナーの後ろに4人が続く。

そして玉座に続く階段の前までくるとシュタイナーは立ち止まり4人に対して跪くよう指示した。

3人が素直に跪くのにつづきエロ太も跪いた。

（あつれー何でリーダーも従ってるの？おかしくない？）

山彦と竜也を横目で見るとやはり玉座の男とシュタイナーに心を奪われた様子がわかる。次いで大祐を見ると瞳の色は元に戻っているがやはり正常のようだ。

（とりあえずここは大人しくして乗り切ろう）

改めて決意すると自分の足に周りから見えないよう爪を突き立てた。

ほどなくして上の方から低い声が響く。

「よくぞ来た！異世界の勇者たちよ。余はオルティガ王国国王ガイアス3世である。現在わが国には未曾有の危機が迫っており。西のクレスト帝国が異世界から人間を呼び出しその力を持って戦争を行っている。それに対抗するためにわが国でも同じ異世界人を召喚した。それがそなたらである。どうか我が国の平和と繁栄のために戦ってほしい。」

そう一人で一方的に言い切った。

「は！若輩ではありますがオルティガ王国のために全力で戦う覚悟にございます」「」

突然の一方的な話に対して何か疑問を感じるどころか、むしろ喜んだ様子の山彦と竜也は高揚した声で宣言した。

もし自分の足に痛みを与え続けていなければエロ太自身もまた何の疑問も覚えることなく同調していたであろうことがわかる。

（やっぱり召還されると同時にどこかいじられてるか。）

心の中で考えるエロ太の様子に気づくこともなく王は

「うむ。そなたらの忠誠に期待する。」とだけ言いあとは興味がないとばかりに王妃とともに退出した。

続いて貴族が退出する気配がする。

その気配がなくなると上品なメイド服のようなものを着た30代くらいの侍女が近づき、

「はじめまして。わたしは皆様のお世話を仰せついております侍女の代表、メロディア・フラメルと申します。本日はゆっくりお休みいただくよう指示を受けております。どうぞこちらへ、お部屋までご案内いたします。」

そう言いついてくるように促された。

部屋へ案内される途中ヤマとタツのコンビはいろいろ質問していたが、詳しいことは明日改めて説明されるということだった。

広く大きな廊下にはフカフカな絨毯が引かれていて、壁際には等間隔で絵画や壺などが置かれている。外を見ると日が沈んでいることがわかるが廊下の天井近くには光る石が埋め込まれていて室内は明るい。

5分ほど歩くと目的の部屋に到着した。ドアを開けるとそこには広い部屋があり長椅子やテーブル、暖炉などがあった。部屋の中に入ると左右に6つの部屋がありそこが寝室らしい。

各自に若く美しいメイドが世話係としてつくということで部屋に入ってきたが大祐が「急な召喚で、またガイアス様との対面で精神的に疲れた。明日から全力でお仕えるためにも今日は4人で早め

に休ませていただきたい。」という感じの言葉を失礼にならないような表現で告げた。

メイドたちは通路の向かい側の部屋にいたので用があるときは声をかけてくださいとだけ言い退出した。

メイドたちが部屋を出るとーブルを囲むようにして配置された長椅子に腰かける。季節は春か秋なのか程よい気温で暖炉には火がついていない。テーブルに置かれていた飲み物と果物のようなものに手を付け、軽く腹ごしらえをして改めて今日の出会について話し始めた。

15分ほどガイアスへの称賛を風太以外の3人が述べた後、

「いやーしかし素晴らしい！ガイアス様のために戦えるなんて光栄だ。」

「確かに。だが油断はならないぞ。俺たちと同じように異世界から召喚されたやつが他国にいるらしい。侍女の話じゃ異世界人はこの世界にくる際に強い能力を与えられるらしいから俺たちより強い力を持つものだっているかもしれない。」

「明日、時間があればどのくらいの力が付与されたか見るために兵

士の訓練所みたいところを借りて確かめてみよう。リーダーの俺から頼んでみるよ！」

「それは名案だな。よろしくな。」

山彦と竜也と大祐の3人は機嫌よさそうに話している。

しかし先ほどから会話に加わらないエロ太に疑問を持ったのか山彦がエロ太に話しかけた。

「おいおい、さっきから黙ってるけど大丈夫か風太。そんなんじやガイア様のお役にたてないぞ！」

返事を返そうとしたエロ太より先に大祐が口を開いた。

「ま、ま、ま、今日は異世界に来たばかりで疲れてるんだろ。メイドたちにも言ったけど明日から全力で働くために今日はもう寝ようぜ。俺はこの部屋にするけどお前らはどこにする？」

その言葉を受けみんなで自分の寝室を決めた後、大祐は3人に部屋で寝るように改めて促す。

しかし山彦も竜也も、もう少しガイア様や今後について話し合おうと言い寝るのを拒む。

やんわりと休むよう促すがそれでも拒み続ける二人に対して、沸点が低くなってたのか大祐は

「あーーーーーもうメンドクサイ！ただでさえイラついてるのに！」

そう叫び二人の鳩尾へ同時に拳をめり込ませた。気絶した二人を同じ部屋のベッドへ放り込んだ後

「エロ太。お前は大人しく寝るの？逝くの？どっち？」

「話がしたい。」

エロ太が告げた途端、無表情で近づいてくる大祐。

あわててエロ太は言った。

「待つて。違うから。リーダーがイライラしてるのは知ってるよ。俺も「ガイアス様、ガイアス様」言ってるヤマやタツを見てると気味が悪くて仕方ないもの。それで機嫌悪くなってるんだよね？ただそれ以上に困ってるのが俺もちょっとおかしくなってることなんだって！だって女好きの俺がガイアス様は素晴らし〜とか思ってるんだよ？隣にいた綺麗な女よりも男をガン見しそうになってたんだよ？泣きたいのはこっちなんだって。予測では召喚陣に何か仕掛けがあったんだろうけど具体的なことがわからないからその点について

説明してもらいたいんだって。だから気絶させるのは勘弁して。」

一息に言い放った言葉を聞いた大祐は苦笑しながら椅子に座ってエロ太に尋ねた。

「いつから気づいた？」

「召喚されてすぐ。だって男に夢中になるとかありえねえし。」

「なるほど。そんなことで正常な思考を少しでも取り戻せるところがエロ太っぽいな。元に戻りたい？」

「当たり前じゃん！ガイアス様じゃなく王妃様を見つめたい。元の世界じゃ逮捕されてもおかしくないレベルで舐るように見つめたい。」

後半の気持ち悪いセリフは無視して大祐は立ち上がる。

そしてエロ太に近づくと、右腕を振り上げエロ太の腹部に突き刺した。

「な！？」

「動くな！じっとしてろ。血は出てないだろ？お前の魂にかけられている服従の鎖を外してる。」

「んなイキナリかよ！せめて説明を！……ってかちよっ！待って！
イタイイタイなんかわかんないけど痛い！」

「我慢しろ。………ほら終わりだ。」

言うと同時に腕を引き抜いた。その手には確かに血や他の汚れは一切ついていない。

「はあ、はあ、はあはあ、………せめて、せめて、………せめて
事前に何やるかの説明が欲しかった。」

涙目で大祐に抗議するエロ太。

「そんなことより、どうだ？まだ男に心が奪われてるか？」

「はあ………もう大丈夫。」

エロ太は呼吸を整えながら自分の状態を確認した。

（うん、もうあのクソ男のことなんて何とも思っていないな。むしろ王妃を襲ってやりたい。あとは綺麗な奴隷を買っているいろいろやって、貴族の娘を誘拐しているいろいろやって………っと思考がとんだな。それよりも今は現状の確認だ。）

「結局俺たちは何されたんだ？」

エロ太は自分で知らべるのもメンドイしさつさと理解するために率直にリーダーに尋ねてみた。

2話 人生2回目？の異世界訪問（後書き）

ホントは現状説明も入れてもつと長くなる予定だったんですけど、分けることにしました。というわけで次回が現状確認になります。ただ基本的には『元魔王様』を優先して更新していくんでこっちの更新は遅くなります。おそらく次の更新は9月の2週以降になると思います。

3話 現状確認、そして……（前書き）

ひとまず投下しました。あとで修正する可能性はあります。

またあらためて注意しますが、これは悪ルートです。人助けなんてまったくしません。

人を殺したり、女を襲ったりするのがほとんどです。そういうのに嫌悪感を覚える人は注意してください。

3話 現状確認、そして……

「そうだ。ついでに聞きたいんだけどさっき大祐の眼、色が変わってたよな？実はもう魔王の力を自在に引き出せるのか？」

「うーん…説明するのは良いけどあっさりでいいか？詳しくするなら長くなるぞ。」

「できれば詳しくが良い。だってお前、魂の鎖を外したって言ったけど何でそんなことできるんだ？それに山彦と竜也の呪縛はなんで外さないのかとか疑問だらけだし。」

「あの二人のことは大した理由じゃないんだけど。まあ、良い。あー説明するけどその前にメイドからなんか飲み物もらってきて。たぶん喉渴くから」

「わかった。」

エロ太はそう言いメイドたちに飲み物を持ってきてくれるように頼んだ。

そして15分後、メイドたちは飲み物をテーブルに置いて退出する。

「さて、じゃあ始めますか。」

湯気を立ててる温かい紅茶のようなものを飲みながら大祐は話し始めた。

「最初にざっくり言うのだ、この国の召喚では異世界召喚によって勇者が呼び出される際にいくつかの能力を与えられるらしい。」

1つは話し言葉と文字の読み書きの情報。普通に会話ができるし、その棚にある本の表紙も読めるだろう？

2つ目が戦闘能力。かなり上昇してるみたいだな。俺たちの世界で言うなら下級の魔法使いが貴族たちのような上級クラスになるようなものだ。

3つ目が王族への服従の呪いだ。これを能力と言っていいかは微妙だけど

そんでこいつらの影響、特に2つ目によって俺の中にあつた魔王の力が表に出始めた。戦闘能力の付与は魂と肉体の両方に行っているみたいだな。結果として俺の魂の深い場所に眠ってた魔王が起こされた形だ。

その力を使ってエロ太の呪いは解いた。けどまだ完全に起きたわけではないってところだ。わかったか？」

「ホントにざっくりだな。まあ、起きた現象はわかった。個人的に

はもう少し詳しい原理を

」

エロ太の言葉を遮り大祐はまた話し始める。

「詳しい原理は やっぱりやめよう。長くなるし面倒だ！
それよりも今後のことだが。」

「面倒って…… 今後のことは明日この国の連中から説明を聞いてからでいいんじゃないか？」

「説明を聞くまでもなくわかりきってるだろう。この国が俺たちにやらせようとしていることは、王の野心のため戦えってことだろ。」

「まあ、そうだろうけどな。」

お互いの顔を見合わせ苦笑する。

そう、最初から俺たちを召還した理由なんてわかりきっている。

先ほどの謁見の際に言ってたじゃないか。戦えと！

説明を受けるまでもない。

「しかし、まあまあ…… フッフ…… 本来は魔族に対抗するための勇者を人間相手に使うとは。…… フッフッフッ
ハハハハ…… まったく人間とは欲深いな！ハハハハハハ」

一人で哄笑する大祐。

（え！？どうしたんだ急に。いきなりキャラが変わってねえか…
まさかおかしくなった！？）

思いながら大祐の顔を見つめると再び瞳の色が変わっていた。

遅れて部屋の空気が変わっていることに気付く。知らぬ間に冷や汗をかき体が震えていた。

よく見るといつのまにか部屋に高レベルの結界がかけられていた。

大祐はバカにしたような目でエロ太を見ていた。

「何を驚くんだ“風太”？鈍い奴め。言っただけだろう？魔王の力を使ってお前の呪いを解いたと。」

大祐の声の質まで変わっている。

一言一言がすさまじい圧力となって感じられる。

何で気づかなかったのだろう。魔王の目覚めは完全ではないと言われたからか？

愚かなことだ。風太の力など魔王の0・0001%にも満たない。

魔王がわずかでも表に出始めたのならそれはもう人外の領域。

「あいつらの召喚のおかげで既に抑制不能となった。1秒ごとに、私の中の魔王の部分が人間の部分を侵食している。さっきまでは人の部分が勝っていたけどな。既に半分以上は魔王となった。」

成程、おそらくは召喚についての説明を受けてる時に人の部分が負けたのだろう。だからこそ急激に変化した。

ニヤリと本人は楽しそうに、しかし風太にとっては恐怖以外の何物でもない笑みを浮かべて大祐は語る。

「バ力な連中だ。普通に召喚し助力を頼むだけなら私も魔王の力を抑えるために必死になっただろうに、服従の鎖をかけようとするなんてな。殺してくれと頼んでくるようなものだ！」

(怖い！怖い！怖い！)

急激な話の展開に、そして何より大祐から放たれる圧力によってパニックになった頭では何をしたらいいかわからない。

必死に絞り出した事を傍目にもわかるくらい身体と声を震わせ風太は尋ねてみた。

「で、で、で、でも、あ、あ、あ、あ、あい、あいつ、あい、あい、あ」

「少し黙れ。もうすぐお前も“戻るはず”だ。」

言われ押し黙る風太。

荒くなった呼吸を懸命に落ち着かせようと深呼吸をしようとする
がうまくいかない。

それどころか過呼吸になりかけた時！

唐突に体の震えが止まり、汗も止まる。

呼吸も正常になり意識がクリアになる。それどころかむしる力が

わき出るのがわかる。

この感覚は

（使徒の力！）

「ようやく来たか。」

大祐は特に何の感情もない言葉を放つ。

一方で風太は力と共に本能が、殺意と性欲、破壊衝動が強くなるのを感じていた。

「鎖を外すついでに“起こしておいた”。お前の方は私に比べれば元の力も少ない。すぐに完全な使徒となるだろう。それまで待て。」

そして数分が経ち

「どうだ？まだ終わらないか？」

魔王が聞けば

「もう大丈夫です。久々の感覚が心地よく感じられます。」

忠実なシモベが答える。

「ふん。昔同様に普段は敬語を使わなくていい。機嫌の悪い時だけ気をつける。」

「わかった。」

「それよりさっき何を言おうとした。」

「ああ。あの召喚式の服従についてだけど、あれはもともとそういう機能がついてて今の王族にはどうしようもないとかの可能性はないのか？」

先ほどと違いスラスラと話す風太。

魔王が瞳の色が変わり身にまとう気配も大きく変わったのに対し、風太には外見上の大きな変化はない。

「話しかけてきた召喚士を覚えているか？」

筆頭魔術師であり第二王子でもあるシュタイナーのことだ。

「覚えてる。王と同レベルで頭を下げたくなつたな。顔が似てたし王族だと思うけど。」

「あの召喚式は王族に服従するようになっていた。特に1番は王に對してだ。だが巧妙に隠されてはいたが割と最近のものである新しい式が組み込まれていた。あの召喚士にも王と同レベルで服従するようにするためのものだ。そして書き加えることができるなら、消すこともできるタイプのものだったからあの式は。」

一息つき飲み物を飲んだ後、再び語り出す。

「つまり本気で服従の能力を解こうと思えば解ける。しかし連中はそれをしていない。よって有罪だ。」

「なるほどな。それじゃあ、さっそく殺しに行くのか？」

ワクワクした顔で尋ねる風太は、もはや初めに尋ねた魔王の力を取り戻した詳細な理由などどうでもよくなっていた。

現実到现在ある力を振るいたくしてしようがないのだ。

「それも良いがな、どうせなら野望が実現しかかっている時に殺してやろう。充実感を覚えてる時にすべてぶっ壊してやろう。せっかくバカ二人が服従してる状態だしな。」

「竜也と山彦はそのままにするっていうことか？」

「しばらくはな。当面は勇者として活躍させる。そしてこいつらがいくつかの国を奪い取った後にこの国を消してやろう！」

「それはそれで面白そうだな。じゃあ俺たちはどうする？」

「特に決めてはいない。気まぐれにやりたいことをやればいいだろう。」

残酷な笑みを浮かべて宣言する魔王。

そして同じような笑みを浮かべる使徒。

「ようやく私の力もほぼ元通りになった。」

そう言い膨大な魔力で編みこまれた、金で縁取られた漆黒のマン

トを生み出し身に着けると

「行くぞ。」

同時に二人の姿が掻き消えた。

翌日、勇者が二人消えたことで城内は大騒ぎとなる。しかしそれもすぐに収まることになるのだが。

山彦と竜也は王族への服従によりすぐに優先順位の低いことと認識するようになる。

王は焦り、探し出すように命じるが残った二人の力を見たことで戦力は十分と判断する。

山彦と竜也があまりにも大きい力を持つことから召喚の際に付与される力は二人で大部分を手に入れ、逃げた二人はほとんど力を持たないと考えたのだ。それにより服従の効果も低く、逃げるという選択をとったのだと。

実際に過去にそのような事例が数回あったことや、謁見の際に風太が正気を保っているように見えたと多くのものが感じたことなどからそう判断された。

勇者たちもそれを裏付けするような発言をしたこともあり（ただし

その発言は大祐が気絶させたときに意図的に刷り込んだものである）、逃げた二人に関しては秘密裏に処分するよう命令を変更する。

そして一般には勇者の召喚の情報は伏せられる。

やがて勇者が表舞台に立つとき、国民たちに公表された勇者は“2人”であった。

4話 ファールーンへ（前書き）

細かい設定は後で変わるかもしれませんがとりあえず投稿しました。

4話 ファールーンへ

城を抜け出した二人は城下にいた。

城門を抜けた先には貴族の屋敷が立ち並びそこを超えると再び大きな壁がある。そしてその向こうに平民たちが暮らしていた。王城を中心としたドーナツ状に貴族街、平民街が広がっている。

夜は深く、王城や貴族街の屋敷からは明かりが漏れているが平民街は真っ暗で通りには人の気配も感じない。

一方で城内や貴族街には多くの衛兵がいてその出入り口には固く閉ざされた城壁があるが空を飛び空間転移を使いこなす魔王の前には意味のないものである。

「さて、まずは最低限の知識を得るか。」

大祐は適当な家に忍び込むと、寝ている男の頭に手をかざし記憶の中にある情報を覗き見た。

数秒後には隣に寝る女の頭に手をかざす。次いでその幼い子供へと。

同じような行動を他の建物でも繰り返し、風太が待つ人気のない場所へと戻る。

得られた情報を風太の頭に直接転写する。

そうしてこの世界の平民が持っているおおよその常識は理解したのであった。

すでに貴族たちにも同様の作業を行っているために平民が知らないことも理解している。

オルティガ王国の西にはさまざまな自治区があり西の端には巨大な帝国がある。

南には多数の小国が入り乱れさらに南にエルフの大森林地帯、それを超えると大きな王国が1つ。

北には複数の国があり、さらに北へ行くと寒さに強い獣人や、洞窟や地下を拠点とするドワーフの国。

東にはこれまた複数の国があり、その先の大山脈には竜が住み、その東の大砂漠を超えてくる魔族の監視を行っている。

国は単一種族の国もあれば混合しているところもある。

行き先を決めかねている魔王が「X、お前に希望はあるか？」と問う。

「悩むな。俺はエルフ萌なんだけどこの世界のエルフは……」

それに対して困惑した顔で答えるX、こと風太。どうやら気分で呼び方を変えるらしい。

「ああ、なるほど。」と、風太の困惑の理由を理解する。

「まさかエルフが不細工の代名詞だとは！」

大きな声で風太は叫ぶ

そう二人がのぞいた常識ではこの世界でのエルフとは不細工な種族であった。実際に他人の記憶の中にいたエルフはすべて不細工だった。

「ドワーフや獣人、ドラゴンはイメージ通りなのになんでエルフは不細工なわけ？おかしくね！？エルフは美形と相場は決まっているのに！？」

風太の心からの叫びを無視し魔王は再度問う。

それに対し今度は真剣に答える風太。

「特に行きたいとこないし適当に街を襲えばいいと思う

のだが。この国はこれから戦争頑張ってもらってから、俺たちは何もしない方がいいんだよね？んで確か西のクレスト帝国と戦うようなこと言ってたからそっちも除外。」

「南は多数の小国、エルフ、その南は原始人のような部族の王国だな。」

「不細工エルフや原始人も除外つと。北は寒そうだから個人的にパス。」

「残るは東だな。」

大祐は腕を組み暫し考える。

そして顔を上げて告げる。

「決めたぞ。東の2つ先の国『ファールーン』で遊ぶ。飽きたらその北東にある『勇者の聖地ミリティア』へ行き各地から集められた聖女や巫女を食い散らかすでしょう。そして竜族の住まう大山脈『断魔の霊峰ドラグニール』を越え砂漠の彼方の魔族とやらを見物する。」

「聖地には興味あるけど砂漠越えは嫌だなあ。」

エロ太は弱めに反対を表明するけど魔王はそれを無視しファールンまで転移で行くことを告げる。

『遠見』の魔法を使い数百キロ先の国を確認する。

そして未だブツクサ言う部下を連れて転移した。

「ここがファールン？」

転移後すぐに風太が声を上げる。そこは街道なのだろう、家や畑などとは見当たらない。

「ファールンの街道だ。国境から少し離れた場所だ。久しぶりの異世界で時間はいくらでもあるんだ。歩いてみるのも悪くはあるまい。」

そう告げ歩き出し、慌てて風太もついていく。

雲一つない空には数多の星が輝き、夜中ではあっても視界は悪くない。

周りの自然を鑑賞しながらしばらく二人は無言で歩く。

歩いてる途中でいくらかのモンスターがいた。

この世界のモンスターと魔族は別と区分されているようだ。

街道を歩く二人を視認したモンスターは食料として襲おうとしてくるものの大祐が風太が見つめるだけで訳の分からぬ恐怖を感じ逃げ出していく。

自然の中で生きるだけあり危機を察知する能力は優れているのだろつ。

結局、本格的に襲われることもなく2人は黙々と歩き続けていた。

歩き始めて2時間が経過したとき変化があった。

空は徐々に白み始めていてもうすぐ日が昇るのだろうと思われたとき、2人の耳に金属がぶつかり合う音が聞こえた。

音の発生源はおそらく数キロ以上は離れた場所だ。

人には聞こえないだろう距離の音も今の二人にはとらえられる。

風太が耳に手を当て集中して音を聞き取る。

「これは……………戦ってるな。微妙に人の声がするし。」

「そうだな。歩くのにも飽きてきたころだ。ちょうど良い、行くぞ。」

それだけを話し、すぐさま近くまで転移した。

転移先では予想通りに戦闘が行われていた。

荷物を大量に満載した馬車が3台と人が乗るのであろう馬車が2台。馬車を守って戦うものが30名ほど。馬車を襲おうとしているものが50名ほどいる。

その様子を少し離れた場所、魔王の魔法で姿を消して観賞してい

た。

「小規模な商隊とそれを護衛する冒険者、金を目当てに襲い掛かる傭兵崩れの盗賊が50名ほどつてところか。どうする？大祐。」

「冒険者の中に女が4人か。後衛の女2人だけ合格でいいな、前衛として戦ってる2人はごつくていらない。……………どうやら馬車の中にも女が1人いるな。そっちは合格だ。」

何が合格かは尋ねなかった。代わりに

「前衛のあの赤い髪の女は俺が貰うぞ。」

「好きにしろ。」

「あとはどうする？」

「情報は合格した女から引き抜けばいいだろう。あとはいらん。」

言うと同時に魔法を発動させた。

ボックスⅡオークスはAランクの冒険者である。

SSランクは『伝説の勇者』たち。

Sランクは『英雄』と呼ばれるもの。

SSランクは勇者の中でもさらに優秀な者のみが届く領域であり、Sランクは普通の勇者のランクである。

+ Aは勇者の血を引く一部の天才がなり得るランク、故にその次のランクであるAはこの世界の一般の人間が届きうる最高のランクである。

勇者が冒険者になることなどほとんどなく（それでも各国が武力

として頻繁に呼び出すためにいることはいる）、勇者の血を引く王族や公爵が冒険者になることもほとんどない。

よってAランクとはある意味冒険者の最高ランクと考えても良い。

バックスもまた最高の冒険者の一人と世間では受け止められていた。

彼の名前が知れ渡ったのは約20年ほど前、魔族の監視者たるドラゴン族の1匹が掟を破り禁断の儀式を執行し失敗、邪竜に堕ち各国に多大なる被害を与えた時のことである。

同族のドラゴンたちは魔族の監視という使命の元、大山脈を下りることができず討伐は国々に委ねられた。

初めは勇者が討伐に向かうが邪竜は複数の国々を移動し暴れまわっていた。

勇者とは国の象徴でもありその勇者が他国へ侵入することは国と国との関係において多大な影響を及ぼす。

事実、ある国は邪竜の討伐を口実に勇者を送りその国の一部を占領するという事件があり、ついには全面戦争となったのである。

人と人が争う最中にも邪竜は襲来する。

勇者、人、邪竜が争った結果、大地は荒れ、国は疲弊しやがては両国ともに滅ぶこととなった。

こうした時に竜を討つため立ち上がったのが冒険者たちであり、20歳の時のバックスである。

冒険者ギルドは国を越え結びついておりまた国からは独立した組織である（たまに例外があるが）。よって国という壁を越えて活動することができる。

あるパーティがそれまで傷一つ負わせられなかった邪竜を追い詰めることに成功するがあと一步のところで1人を残し殺されてしまう。

この時残ったのがバックスである。

彼は仲間に託された魔法の武器を身に纏い自分を鍛え、ついには邪竜を討ち取ることに成功したのである。

そしてその功績によりAランク冒険者となり、勇者とその血族以外で初めて聖地ミリティアでの『祝福』を受けたのである。

その後も彼は世のため人のためと戦い次々とその名声を高めていく。

勇者の血を持たない彼の英雄譚は、同じく勇者の血を持たない大多数の平民の憧れとなり希望となる。

こうして彼は生ける伝説となつたのであつた。

20年が過ぎ40歳を超えた現在も『祝福』を与えられたことにより若い時分とほぼ同等の実力を誇る彼の元には多くの人が集いその冒険者としての生き方、戦い方の教えを乞う。

今も10年以上を共にした仲間たちと共に、数多くの冒険者に冒険者としての在り方を教えていた。

今回彼が受けた依頼は商隊の護衛である。

最近勢力を伸ばしてきた商会の一行が運ぶ3台の荷馬車と商人たちの護衛が目的である。

彼らを通る街道はモンスターも少なく弱いので本来は+Cランクの護衛がいれば十分であつたが、近ごろ北方から傭兵崩れの盗賊団が移住し街道付近を縄張りとしていてまたその数も全部で100名ほどにもなり多くの被害が出ていた。

Bランクの冒険者パーティでさえ殺されるといふ事件にまでなり、

困り果てたところでボックスが名乗りを上げる。

そして商隊を護衛し街を出発した。

護衛をしているのはボックスのパーティとその傘下のパーティ（中堅3つ、初心者2つ）と大人数となった。

盗賊に手を焼く商人ギルドが盗賊を倒してくれたら賞金を出すということで、もし護衛中に現れなかったら初心者は置いて盗賊の本拠を討つことで報酬は賄う予定である。

気のいい仲間や依頼主たち。天気にも恵まれ旅は順調だった。

ボックスにとって嬉しいことに、今回初参加の初心者パーティの1つ『平和の剣』の4人は才能に満ち溢れた者ばかりであった。

農村出身の剣士 カイル

カイルの幼馴染で魔法使いの リーシャ

修行中のクレリック ユファイ

ユファイに一目ぼれしてついでにきたレンジャー ロック

チームとしてもバランスが取れ、仲が良い彼らは、未だ10代半ばでまだまだ未熟ではあるが将来は4人とも+Bに届くであろう才能の持ち主であった。

特にカイルに至ってはボックスをものぐ才能を持っていたのである。

自分も年老い徐々にはあるが力を失っていく中で後継者を探していたボックスにとって、カイルは相応しい少年だったのである。

ボックスは彼らに、カイルに自分の持つすべてを託そうと心に決める。

しかしその願いがかなうことはなかった。

5話 暴虐の始まり

ボックスたち一行が護衛を初めて1週間。

野営を行い、そろそろ朝になるだろうという時に矢の雨が降ってきた。

ついに盗賊が現れたのである。

事前に気付いていたボックスや古株が魔法で防いだので被害はなかった。すぐさま寝てる連中を起こす。

矢が防がれたことで直接剣や槍で攻撃しようというのか盗賊たちが姿を現した。

その数80名。

事前情報では100名以上いる大規模な盗賊団という話だから、油断せず古株の魔法使いにあたりを探らせると誰もいないということだった。

おそらくは別の場所で働いているか本拠地にいるのだろう。

盗賊が攻めてくる前にすぐさま最適な陣形を整える。

その様子を見て一瞬襲うことを躊躇したが人数差があることと、

向こうには護衛する対象がいるためにそれが足かせになると考えたのか盗賊たちは襲ってきた。

最も護衛の中にボックスがいると分かればまた話は変わったのだろっが。

それなりの統率の元向かってくる盗賊たち。

相手はBランクを倒す盗賊。

初心者はもちろん、中級パーティも足がすくむが流石はAランクの竜殺しボックスである。

指揮を古株に任せると一人で突撃、瞬く間に10人を屠ったのである。

驚き足を止める盗賊とその姿に闘志を燃やす冒険者たち。

盗賊たちは距離を置き

矢を放つがその前にボックスは仲間の元に下がっていた。

ボックスなら一人で倒せる相手である。

だが新人たちに経験を積ませるために彼は後ろに下がった。

これは依頼を考えると護衛失格な行為であるが、ボックスと古株

の仲間ならこちら側には1人の被害も出さないと判断したためである。

実際にそれは間違いではなかった。ボックス達にはそれを可能にするだけの実力があつた。

今度は油断なく接近してくる盗賊たち。迎え撃つ護衛もボックスの指揮の元、慎重に構える。

そしてついにぶつかり合うことになった。

ピンチになりそうな者をボックスや古株が助けながら、冒険者たちは20名ほどの盗賊を倒してた。

冒険者側の死者、重傷者はいない。

ただし初心者たちは体力や魔力がそろそろきつくそうであり、ここらが潮時とボックスは単身で動き盗賊をさらに20名ほど倒した。

これで数は互角。

冒険者たちも疲労がたまっているようだが、一番強いボックスは未だ悠然と構えている。

旗色が悪くなったことを感じた盗賊のリーダーは撤退を宣言し、

逃走を図る。

それを単身で仕留めようとボックスが動く、その時！

世界が氷に包まれた。

「なんだこれ」

カイルが呆然とつぶやく。

隣にいたリーシャにしてもこんな現象は初めて見るもので何が起きているのかわからない。

高位の魔法の1つなのか！そう思い他の人たちを見渡すも中級パーティーやボックス率いるAランクパーティーに所属するものでさえ驚愕しているのがわかる。

そして改めて遠くに視線を向ける。

先ほどまで太陽が昇りかけ明るくなりつつあった空が今は見えな
い。

前も後ろ右も左もそして真上でさえも氷に覆われていた。

「陣形を整えろ。回復薬をつかい傷も魔力も回復させておけ。油断
するな！」

すぐさま戻ってきていたボックスが指示を出す。

それに従いみんなが動き出す

「ボックス、これはなんだ？」

古参の剣士がボックスに尋ねるが

「わからん。盗賊たちの仕業でないことは確かだが。」

そうリーシャが回復をしながら盗賊たちの方を見ると彼らも動揺
しているのがわかる。

想定外の事態なのは明らかだ。

「うおーゾクゾクしてきた。絶対凄いことだよこれ！」

「不謹慎ですよ。ロック」

興奮したように叫ぶロックとそれをとがめるユフィ。

「大丈夫だって。何があってもユフィは俺が守るから。」

「そういうことを言ってるんじゃない。だいたいあなたはいつも」

言い合う二人を見てつい笑ってしまう。こんな時でもいつも通りの二人に少し安心する。

「リーシャ大丈夫か？」

「カイル。私は大丈夫。」

「何が起きてるのかわかるか？」とカイルが尋ねるが

「わからないわ。バックスさんにもわからないようだしあたしの知識にもこんな魔法はない」

「わたしも知らない現象です」

「リーシャやユフィでも知らないことなのか。」

いつのまにか言い争いをやめていた二人が会話に参加する。

二人とも若輩で実践は未熟ながらも毎日勉学に励み、その知識量はその道の上級者にも引けを取らないことを知っているロツクがつぶやく。

「とにかくしっかりとバックスさんの指示に従い行動しよう。」

リーダーのカイルが言うともみんなが頷く。

「万が一のときは俺はユフィを守るからカイルはリーシャをしっかりと守れよ！」

「わかってる。」

力強くうなづくカイルの言葉を聞きほほを紅潮させながらもリーシャはカイルにくぎを刺すことも忘れない。

「無茶はしちやダメよ。」

「わかってるよ。ケガをしないように、でもしっかりとリーシャを守るから。」

そして見つめあう二人、それを見て

「良いなあ。ユフィもあーゆー反応してくれないかなあ？」

「しません。」

にべもない反応に落ち込むロック。

仕方ないですねーという顔をして

「ロックもケガをしないようにしてください。あなたが傷つくと少しは悲しいですから。」

『少しは』を強調するユフィ。

でもそれで十分嬉しいロックは

「わかった。ユフィのためにも怪我しない！」

そう言いユフィに抱きつき

「ユフィー大好きだよー」

「ちょっと！離れてください！」

いちやいちやする『平和の剣』の様子を見ながらも一つの初心者パーティー『グローリズ』は

「いいな、俺たちも女の仲間が欲しい。」

10代半ばの男だけのチームはみんなそう思っただけであつた。

「ぎゃー！ー！ー！」「わー！ー！ー！ー！」「や、やめろ！」「助けて！何でもするから助けてください。」

遠くから盗賊たちの悲鳴が聞こえてきた。

盗賊たちは先ほどよりも遠くに行っており何が起きてるのか詳しいことはわからないが次々と数が減ってる様子は確認できる。

リーシャたちの背後にある氷の壁を壊そうとしていた人たちも戻ってきてボックスの指示に従い陣形を整えた。

そしてそのころには盗賊たちの声が全く聞こえない。

全員殺されたのだらう。

あまりにも早すぎる展開だ。

「何が起こるかわからん。みんな気を抜くな！」

ボックスの音が響き渡った途端、目の前に2人の男が現れた。

時は少し戻り魔王の力で商隊と盗賊を巨大な氷で閉じ込めたあと、二人はまず盗賊の元に向かった。

盗賊たちは世界が氷に包まれてしばらく呆然としていたが。リーダーの指示の元すぐさま撤退し始めた。

そして商隊から離れた、氷の壁までくると力自慢たちが一斉に壁を壊そうと攻撃し始める。もっとも氷には傷一つつかないのだが。

そんな様子をぼんやりと見ながら魔王とエロ太は話す。

「あいつらは全部殺してもいいんだよね？」

「30人ほどか。俺が25人でお前は5人だ。」

「おかしくね！？普通は15ずつだろ！百歩譲って上下関係考えたとしても20と10じゃね？」

「ちっ！まったくわがままな部下だ。まあ、この世界に来て初めての殺しだからな。15ずつで行くか。」

その言葉を聞き不思議そうな顔をする風太。魔王がこんなあっさり風太の言い分を聞き入れるなんて珍しい。

「どうした？」

「いや、なんか違和感が。……………お前さっき『俺』って言ったか？」

「言っただな。」

苦笑しながら言う魔王。

城を出てからずっとどこかで違和感を感じていたが、これはやっぱり変だ。昔の魔王っぽくない。

そんな風太の内心が顔に出ていたのだろう、察した大祐は言う。

「人間の部分が完全には消えていない。っというより混ざり合った状態で変化が終了したみたいだ。」

「どういうことだ？」

「戦闘能力は問題ない。だが人格面が混ざっているようだ。城の中では魔王の力が起こされたばかりで魔王の面が強く出ていたがここまで移動するうちに人の部分がまた盛り返し、結局微妙に混ざったまま定着したんだろうな。」

「穏やかになったってことか？」

「いや、気性は落ち着いたかもしれないが気に食わなければ殺すことに変わりはない。ただそれよりも性欲が強くなったようだ。殺人衝動は魔王が持つもの。対して性欲は人も魔王も持つもの。合わさった分性欲の方が強いってことか。ま、調べなければ詳細はわからないがどうでもいいだろう。」

「なるほど。それで獲物を平等にしてもいいなんて言い出したのか。」

「そういうことだ。盗賊を殺すよりあっちの女を抱きたくて仕方ない。」

興奮したように言う魔王。その目は情欲で溢れている。

「あゝやっぱり魔王は魔王だな。ただ優先される本能が違うだけで。」

大祐は特に答えず薄く笑う。

「でもどうしてそんなことになったんだ？」

「1番をコピーしてできた2番。その2番をコピーしてできた3番。このとき1番と3番は微妙に違っててもおかしくはないだろう？おまけに人間の体だったり、魂に力を入れられたりとイレギュラーばかりだしな。」

風太は大祐のたとえに首をかしげる。

「どういう意味だ？」

「そんなことよりもさっさとやるぞ。いらないなら全部私が殺すぞ。」

「や、待って俺もやるぞ。」

話を切り上げ二人は同時に盗賊に襲い掛かった。

盗賊たちがいきなり現れた二人に驚いている間に魔王が一番近くにいた盗賊の心臓を手刀で貫いた。

次いで隣にいる男の腕を落とす。

「ぎゃーーーーー!!」

面白いから左腕を握り、骨を砕いた。

「ぐっわあああああーーーーー!!」

横では風太が次々に殺している。

「て、てめえらー!!」

三人の盗賊が向かってくる。

魔王はそれに対して腕を伸ばす。

そして開いた手のひらをギュツと握ると、3人の盗賊はものすごい圧力を受けたように圧縮された。

ブシューーと嫌な音を立てて血が当たりに飛び散る。

魔王が指の力を抜くと空中に浮いていた肉団子が地面に落ちる。

その腕をそのまま次の獲物へ向けると、

「や、やめろ！」

「助けて。何でもするから助けてください。」

仲間が肉団子になるのを呆然と見ていた盗賊たちが次の標的が自分だと悟り必死に命乞いをする。しかし

再びブシユ

！！！！という音とともに血が噴出しあ

つさりと盗賊は殺された。

「フッフッフッフハハッハハッハハハ……いい気持ちだ！
楽しいなあ！」

高らかに笑い続ける魔王。

同じように笑う風太と共に盗賊たちの命乞いを聞き流し、遊んでるかのような気楽さであっさりと皆殺しにした。

「盗賊は大体狩りつくしたな。残りの連中のところへ行くぞ。」

殺人よりも性欲！な魔王は風太にそう告げると返事を聞く前に転

移を発動させ、ボックス達の前へと移動する。

いきなり目の前に現れた男たちに対して、冒険者たちは即座に戦闘態勢を取った。まだ何も話していないが誰もが迷わず戦う意思を示す。

さきほどまで少しは考えていた味方の可能性を即座に棄却する。

全員が一目でわかった。

この2人は盗賊だけではなく自分たちにも害をなす気だということが。

同時に魔王から発せられる気配に当てられて身体が震えていた。それでも彼らが逃げないのは、いざという時はボックスが何とかしてくれるという信頼があるからだ。

一方でそのボックスはこの状況の真の危険性を認識していた。

（この2人には俺でも勝てない……………）

おそらくは逃げることも難しいだろう。かつて英雄と呼ばれるきつかけとなったあの化け物よりも遥かに強い。特に赤い目をした男はやばい。桁が違う。

これらのことが頭の中を駆け巡る。

なんとか一人でも多く生き延びさせるために考えながら2人を観察していると、両方とも女だけを見ていた。目的は明白である。

ボックスがここまで理解した時、2人は動き始めた。

「よし。やはり私の目に狂いはなかった。胸はCくらいか。ちょっと物足りないが……まあ、良いだろう。」

満足そうな魔王とは対照的に微妙な顔をした風太が言う。

「思いのほかごついんですけど。やっぱり一人くらい分けてくれな
いか？馬車の中にもいるんだろう？」

「そういえばそうだったな。馬車の方は……こっちは文句なしに合格だ。胸も大きいな。」

風太の発言の後半だけを拾う魔王。風太としても魔王が自分の女を分けてくれるはずがないことはわかっていたので特に文句も言わなかった。

「はあ……聖地とやらの期待するしかないか……今日はあれで我慢か……」

「ぶつぶつ言っていないでさっさとやるぞ。」

「はいはい、わかりやしたようだ。」

言いながら軽い足取りで冒険者たちに近づいて行った。

数分で戦いとも呼べない戦いは終わった。

冒険者側の男で生き残ってるのはカイルとロック、そしてバックスだけだ。

その3人にしてもカイルは意識はあるものの両手足の骨を折られて動くことができない。ロックは気絶し、バックスは左腕を失い両足が地面から生えている黒い腕に捕まり動くことができないでいる。

女で生き残っているのはカイルの幼馴染のリーシャ、仲間のユフイ、中堅パーティの前衛であるキャスケル、そして馬車に乗っていた令嬢のマール＝クルパニーだ。

彼女たちは現在、カイルの目の前で凌辱されている。

「ほら！もっと頑張らないとお前たちの大事な仲間を殺してしまうぞ。」

残酷な笑みを浮かべながら魔王が言う。

その足元ではカイルの仲間の2人が裸で蹲り、懸命に口で奉仕している。

そして彼女たちの横では先ほどまで何度も犯され全身に魔王の体液を付着させたマールが気絶していた。リーシャとユフィはマールと同じく純潔を散らされ魔王の体液を全身に染み付かせながらも、仲間の命を助けるために懸命に意識を保ち奉仕を続けていた。

「リーダー！やっぱりどっちか貸してくれよ。」

ごつい女冒険者を先ほどまで襲っていた風太が言うが、魔王は無視する。

「やっぱ、何人が生かしておくべきだったかなあ……そうすればもう少し遊べたのに。」

つぶやく風太と、楽しむ魔王。それを悔しさで怒り狂いながらも

動くことのできないカイル。魔王に声を封じられたために何も話すことさえできなくなっている。

（やめろ！もうやめろ！2人を離せ！）

心の中でいくら叫んでも、2人を助けることなどできない。

（何で！？どうしてこんなことに！？）

ボックスはこの二人組の男の正体に気が付いていた。というより、自分がここまで手も足も出ず勝てない相手など勇者以外に考えられなかった。

そのためカイルと同様に屈辱をかみしめながらも、既に自分たちではどうにもならないことを悟っていた。

紅い目の男は女たちを気に入ったようで、壊さないように何度も回復魔法をかけているのがわかる。そして自分が楽しむためにボックス達を生かしているのもわかる。ボックスたちが生き残れるかどうかは女たち次第であることもわかっていた。

だから声を出すことはできるけども余計なことは何も言わずにいた。

（勇者を殺すには勇者以外にはない。何としても生き延びて、このイカれた勇者の存在を国々に伝えなければ！このままでは凄まじい被害が出る）

自分のパーティの下についた女たちが犯されていることに怒りを

覚えている。だがそれ以上にこの危険な存在を知らしめなければならないという使命感を優先した。

この二人は昔のドラゴンと違い何回挑もうがどうにもならない存在だ。

急に目の前に現れた二人は素手で鎧や盾ごと身体に穴をあけ、あっさり何人かを殺した。我に返った冒険者たちが攻撃したが紅い目の男には傷一つつけれない。そのまま攻撃を仕掛けた者たちが殺されると、離れていた冒険者は一斉に逃げ出した。

逃げた人たちをもう一人の男が追いかけて、氷の壁まで追い詰めるとのんびりと殺戮して回る。

そしてバックスや平和の剣、数人の逃げなかった冒険者、馬車の中の人たちは女とバックス達を残し紅い目の男に遊ばれ殺された。

残った男を動けなくすると女たちを犯し始めて今に至っている。

痛みで泣き叫びやがては強引に快楽を覚えさせられた少女たちの声や、悔しさに泣くカイルを見てバックスも強く湧き上がるものがあるが、それでも黙っている事しかできなかった。

かつて仲間たちを屠った邪竜のときのように……自分の感情よりも優先しなければならないものがあるからだ。

5話 暴虐の始まり（後書き）

殺戮の場面は控えめで書いています。魔王ルートはほとんど殺しまくる場面であることと、規制がどのくらいでかかるのかわからないので……

様子を見ながら書きつつ、必要であれば修正する方向で行こうと思います。

6話 連れ去られる女たち

「ハア…………ハアハア……………」

魔王たちが冒険者に襲い掛かって3時間ほどが経過した。

宴は終わり、倒れこんだリーシャとユフィの荒い呼吸だけが響いている。

2人は強引に純潔を奪われ、そのあと仲間命を盾にさんざん凌辱され続けたが回復魔法がかけられたために大きな傷などはない。

本人たちが気付かぬうちに心の傷でさえも強引に回復させられ、女としての尊厳を奪われた羞恥や屈辱、ショックによって放心状態になることなどもない。

むしろ魔王への怒りと反発心、そして生き残っている仲間を助けるようという思いが湧き上がっていた。

とはいえ疲れ果てているのは間違いなく、今はまず呼吸を整えようとしているようだ。

一方で魔王は脱いだ衣服を纏い直し、「なかなか良かったな。お前はどうかだった？」と爽やかな笑顔で風太に問いかけた。どうやら一時的に衝動を発散させたことで落ち着いたらしい。

「微妙だよ！」

機嫌のいい大祐とは対照的に風太は機嫌が悪いようだ。

予想以上にゴつく傷だらけの身体だったキャスケルを1回抱いて直ぐに殺した風太は魔王が楽しんでる間、羨ましそうな顔で見ているだけだった。魔王はそれに気づきながらも敢えて無視し、女を独り占めしていた。

「んで、そいつらはもう飽きたんだろ？なら俺にやらせろよ。」

そう言い倒れているリーシャに近づこうとした風太に対し魔王が制止させる。

「ダメだ。こいつらは連れて行く。」

「はあ？」

「予想以上に良い身体をしてるからな。まだ未発達なところもあるが数年もすれば火星の貴族の女どもにも劣らないものになるだろう。」

「えーーーーー！じゃあそっちの気絶してるお嬢さんを。」

「ダメだ。こっちは既に十分にいい女だからな。だから無理せず休

ませてるんだろうが。」

「いきなり3人かよ！ずるくね？」

「ズルくなどない。魔王の権利だ。」

言い合う二人の言葉を聞いているバックスたち冒険者組。バックスと連れ去られる当人である女たちは何となくわかっていたことだから驚きは少なかったが、焦ったのはカイルと目覚めると同時に動きと声を封じられたロックだ。

（そんなことはさせないリーシャは絶対に　　）

（ふざけるな！ユフィは　　ちくしょう！うごけねえ！クソ！クソ！）

カイルはリーシャと、ロックはユフィと。

ともに想い合っている大切な人を汚すばかりか連れ去るという。

なんとかして止めようと必死にもがくが魔王の魔法によりまったく動くことも声を出すこともできない。怒り、悲しみ、屈辱、焦燥、さまざまな感情が駆け巡るがどうにもならなかった。

カイルたちと同じくまったく動けない状態のバックスはリーシャたちが犯されている間も大祐を観察していた。そのためにこの展開が予測できていた。「おそらく自分たちは生き残るだろう……リーシャとユフィの選択次第ではだが」と予感していた。

（すまないお前たち……だが何を差し置いても今はこの場を生き残ることが優先だ。）

全ての感情を押し殺し、ただ必要なことだけを見据えていた。

「よし、ひとまず移動するぞ。まずは食事だな。細かいことはそれから決めるとするか」

魔王は一人呟くと片手を上げた。その手が光ると同時に3人の女たちも白い光に包まれる。また、マールが乗っていた馬車とそれを引く馬も光に包まれる。

数秒ののち、光が消えるとすべての傷が消え、人も馬も体力まで回復していた。

「風太！お前は御者をやれ。お前たちはついてこい。」

一方的に言いなち、そのまま馬車へと歩き出した。女たちが逃げ出すという可能性をまったく考慮していないような態度だ。

実際その判断は間違いではなく、馬車に乗り込む魔王を見た3人の女たち複雑な感情を押し殺し黙って後に続く。風太も文句をぶつぶつ言いながらも後に続いて歩き出すと、その背後から声がした。

「待て！リーシャ！ユファイ！ダメだ！」

「ふざけるなお前らーーーー！みんなを返せ。」

拘束を解かれたカイルとロックがボックスに抑えられながらも、声を上げていた。

しかし女たちは苦しそうな表情をしながらも振り返らず魔王の後に続く。

魔王は文字通りの暴君であるため自分の感情や欲求を全く隠そうとしていない。取り繕うことさえしない。わずか数時間の関係とはいえ自分たちを散々抱きまくった男の性格をリーシャもユファイもマールも正確に把握していた。

魔王は男たちに興味をなくし食事に気が向いている。女たちが乗り込めばそのままここを立ち去りカイルたちの命は助かる。それを女たちは理解していた。

同時に自分たちが足を止めればカイルたちの命が再び危機に陥ることも。そして何よりも抵抗すれば自分自身がどうなるのかも彼女たちは充分に理解していた。

ホントは今すぐに逃げたい、カイルたちのもとに駆け寄りたい！そう思っただけでも仲間を思う故にそれは決して出来なかった。

冒険者ではないマールはカイル達に対しては特に強い感情を抱いてはいない。そんな彼女はただ紅の目をした男が恐ろしく従う以外の選択肢がなかった。

「リーシャ！リーシャ！ッどうして！？ 離してくださいバックスさん！俺は二人を！」

「離せ！離せよお前！あいつらを見捨てる気かよ！」

「なんで二人が大人しくついていくかわからないのか！お前たちを助けるためだろうが！」

暴れる二人に対し、バックスも声を荒げる。

カイルとロツク、二人の言いたいことは嫌というほど理解していた。それでもここは大人しくしているしかなかったのだ。いつか女たちを助けるためにも。

無理やり自分を落ち着かせ改めてカイルたちに言う。

「今ここで襲い掛かっても犬死するだけだ！そして女たちはあの男が飽きるまで弄ばれることになる。あいつらは間違いなく異界から呼ばれた勇者だ！俺たちではどうにもならん。各国に応援を要請し、俺たちも力をつけることが最善なんだ！」

「わかってる！だけど今、あいつらは」

必死に言い合う彼らの声を背に、涙を流しながらリーシャたちは馬車へと向かう。一刻も早くこの場を離れるために足早で。恋しい男を救うために汚されるのをわかっていながら馬車へと乗り込んだ。

それを確認した風太は「良いなあ…俺も可愛い女が欲しいなあ…」と低いテンションを保ったまま馬に鞭を打つ。

そして馬車は動きだし、少しずつこの場を離れていく。

「待て！ちくしょう！待てよ！返せ！ツツツツツツクソー――
――」

誰とも判別のつかない叫び声だけが、この虐殺の跡に響き渡った。

あの虐殺から数時間が経った今も風太は御者をやっていた。大祐が女たちから知識を取り込み風太に受け渡したものから参照すると、

次の町というか村まではあと2日ほどかかるらしい。

というのも先ほどの盗賊連中が暴れまわったおかげで付近の小さな集落は軒並み全滅しているようだ。

ご飯がまだまだ先と分かった魔王は自分の“宝具”を用いて食べ物を用意し食べ終わった後は再び女で遊ぶことにしたらしい。

（はぁ……良いなぁ……たまには最高級の女を抱きたいなぁ。）

そんなことを考える風太の背後からは今もユフイの大きな嬌声が馬車の中で響き渡っている。どうやら性魔法を使い無理矢理に感じさせているようだった。自分が気持ちよくなるよりも女を喘がせることを優先していることから大祐はあの3人をかなり気に入ったようだ。

かつて魔王になった世界において、大体が一度抱いたら飽きて処分していた。割と上質な女は飽きるまで自分本位で抱き、気に入った女は今のよう性魔法で優しく抱いて強引に心も自分に向けさせようとしていた。

そしてお気に入りの中でも女としての機能以外にも優秀なものを持つ場合は、性魔法による簡易な眷属としたり自分たちのように魔王の力を直接与えられ大きな力を持つ眷属となった者もいた。

そんなわけでリーシャたち3人はお気に入りなのはわかる。

「はぁ………」

風太の口からはなんとなしに溜め息が出る。お気に入りである以上、自分に回ってくることはないことが確定しているからである。

（リーシャって女はピンクの髪に幼いながら可愛い顔立ち、スタイルは普通だったな。ユフィちゃんは金髪に綺麗で大人っぽい顔立ちでこれまたスタイルは普通。けど大祐の様子から将来性があるんだろうな。貴族っぽいお嬢様はオレンジがかったロングに、けしからん胸してたなあ…俺的にはリーシャタンが一番好みなんだが………無理だろうなあ………）

こんなことを考える風太は、ユフィからリーシャに変わった嬌声を聞きながら馬車を進ませる。

時間は昼、暖かな日が差す草原を狂気を孕んだ馬車は進んでいく。

いくらかの時間が経過し眼前には小さな集落が広がっていた。名前もない小さな集落である。

人口は百人ほどの小さな集落で近くにある畑では性別、年齢に係なくおそらくはほぼ全ての村民が農作業に取り掛かっているのだろう。

雲一つない晴れた空からは暑い日差しが降り注ぎ、村人たちは暑そうに大量の汗をかきながら一生懸命に働いていた。

魔王が女たちから取り上げた知識から、この付近の領主はそれほど重い税を課してはいないため比較的にもともな生活を送れているらしいこともわかつている。

「はあゝゝ疲れた……転移なら一瞬、二人で普通に走れば1時間ほどで着く距離なのに……馬車で4日もかかるとは……」

独り言にしては大きい声で風太が呟く。

「なんか文句あるのか？」と尋ねる大祐に対して「別にゝないですよ。」と明らかに何かを含む口調で風太は答える。

風太が不機嫌なのは当然ながら女がらみの問題だ。

そもそも2日で来れる予定だったのに魔王が途中、川で泳ぎたい（犯したい）だの、木陰で休みたい（犯したい）だの、空中に浮かんで風景を見たい（見ながら犯したい）だの所々で言っただけで余計な時間がかかってしまったのだ。しかも一か所ごとに3人全員を抱くためこれまた時間がかかった。

風太にも女がいれば違ったのだろうが、残念ながら風太専用の女はまだいない。

おまけに一番最初に停まった場所では魔王がお楽しみの最中やることのない風太は仮眠を取ろうとしていたのだが、冒険者が近くを通り魔王にちょっかいを出そうとしたため以降風太が見張りをすることになった（このときの冒険者は魔王が殺した）。

近づいてくる連中の中に女がいればまた違ったのだろうが残念ながら全部人間の男だったので結局数日前にキャスケルを抱いて以来一度も女にありつけなかったのだ。

「はあ〜」

もう何度目かわからないため息をつく風太。

そんな様子を見かねたのか「そんな顔をするな。そのうち良いことあるさ。」といつになく上機嫌な魔王が言う。女を抱いてるせいかやはり残虐性が少し薄く人間としての人格が表に出ているようだった。

もっともそれも血を浴びればすぐに変化することなのだが。

「……………よしわかった。この村はお前の好きにしていぞ！良い女がいたらお前のものにしても良い。」

「マジで!？」

主の言葉を聞き勢いよく反応する風太。

「ああ、構わんさ。私は馬車の方で調教してるからお前の好きにきて来い！」

「よっしやーーーーー！じゃあ行ってくる！」

急激にテンションを上げた風太は村に向かって猛スピードで駆け出した。

「……単純な奴だ……こんな村に可愛い女なんているわけないのに。」

ホントに器量の良い者は盗賊か領主に連れられていくか聖地に導かれるのがほとんどなんだけどな、と呟きながら大祐はリーシャ達がいる馬車へと戻って行った。

この集落から馬車で数時間ほどの場所に領主がいる大きな街『アッスラール』がある。

アッスラール付近の集落が軒並み壊滅しているとの報が領主の元へと届くのはこの2日後であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8777v/>

元魔王の覚醒(悪ルート)

2011年12月16日20時02分発行